

英国における薬剤師の生涯教育

荒川 直子*

英国王立薬剤師協会 (Royal Pharmaceutical Society)

要 旨：患者の安全と医療の質向上のため、薬剤師の生涯教育は必要不可欠である。しかしながら、その制度とフレームワークは世界中で異なる。本稿では英国の薬剤師生涯教育を紹介し、日本の薬剤師生涯教育の将来への展望を検討した。英国は継続的専門能力開発 (CPD) の質的概念を導入したパイオニアであり、ポートフォリオを用いた CPD モデルを使用している。また、英国で行われている CPD モデルにコンピテンシー・フレームワークを先駆けて導入した国でもある。しかし、その CPD モデルも変革の時が来ており、2018 年には continuing fitness to practice (CfP) という、CPD ポートフォリオに外部評価を加えた CPD モデルが導入される予定だ。本稿にて英国の CPD モデルを紹介する中で、患者や社会へのインパクトに焦点を当てた CPD モデルが日本にも必要であると思われる。今後は日本独自のニーズに基づいた薬剤師職能開発モデルの策定が必要だろう。

キーワード：薬剤師，生涯教育，継続的専門能力開発，CPD，英国

青少年のための麻薬教育(医療用麻薬の正しい理解と適切な使用について)

鈴木 勉*

星薬科大学薬物依存研究室

要 旨：1986年に世界保健機関(WHO)はモルヒネなどの医療用麻薬を用いるWHO方式がん疼痛治療法を発表し、このがん疼痛治療法が広く世界に受け入れられ、標準的ながん疼痛治療法となっている。わが国では1989年に徐放性モルヒネ製剤が導入され、ようやくWHO方式がん疼痛治療法による治療が開始された。以来27年が経過しているが、本法が十分に浸透しているとは思えない。その理由は、医療用麻薬の消費量が先進諸国の中でも極端に少ないことと、アンケート調査で疼痛を有するがん患者の64%が痛みを我慢し、疼痛治療を受けていないとの報告もあることである。一方、モルヒネに対するイメージに関するアンケートでは、最後の手段、依存になる、寿命が縮むなどの誤解が多い。このような誤解を払拭しないと、わが国のがん疼痛治療は改善されないと考えられる。そこで、特に重要なのは青少年に対する麻薬教育であり、医療用麻薬に対する正しい理解と適切な使用に関する教育が必要である。日本緩和医療薬学会では薬局薬剤師を主な対象として麻薬教育認定薬剤師制度を開始したので、紹介する。

キーワード：WHO方式がん疼痛治療法，医療用麻薬，麻薬に対する誤解，
麻薬教育認定薬剤師

地域薬局における生活習慣改善支援サービスの提供が利用者の意識に与える影響

渡邊 文之*¹ 小森 雄太^{2,3} 木内 祐二⁴ 亀井美和子¹日本大学薬学部¹, 一般社団法人ソーシャル・ユニバーシティ², 薬樹株式会社³, 昭和大学薬学部⁴

(受付: 2016年4月28日 受理: 2016年7月28日)

要 旨: 本研究は, 地域薬局における生活習慣改善支援サービス(以後, サービス)の提供が, 薬局に対する利用者の意識にどのような影響を与えるかを検証した. サービスは, トレーニングを受けた薬局スタッフが対象者の体成分分析を基に, 食事や運動についてサポートを行った. 評価は, 研究開始前・終了後にアンケートを行い, サービス満足度, 薬局満足度, かかりつけ薬局への認識について検証を行った. 結果, サービス満足度は減量成果の有無に関わらず高い満足度が得られ, 薬局満足度は対照群では差はみられなかったが, 介入群では有意に向上した設問もみられた. かかりつけ薬局の認識は対照群では差はみられなかったが, 介入群(サブグループ解析前の全対象者)では全ての設問において有意に向上した. これにより, サービス提供は薬局満足度, およびかかりつけ薬局の認識を向上させ, 健康サポート薬局を実現するための1つの手段として効果的である可能性が推察された.

キーワード: 薬局満足度, かかりつけ薬局, 健康サポート薬局, 生活習慣改善支援,
メタボリックシンドローム

岐阜薬科大学附属薬局における薬局間分割販売業務の状況調査

井口 和弘^{*1,2} 堺 千紘^{1,2} 横山 聡^{1,2} 伊野 陽子^{1,2} 山下 修司^{1,3}
野口 義紘^{1,4} 松永 俊之⁵ 中村 光浩⁶ 杉山 正³ 寺町ひとみ^{1,4}

岐阜薬科大学附属薬局¹, 岐阜薬科大学薬局薬学研究室², 岐阜薬科大学実践社会薬学研究室³,
岐阜薬科大学病院薬学研究室⁴, 岐阜薬科大学生化学研究室⁵, 岐阜薬科大学医薬品情報学研究室⁶

(受付：2016年4月21日 受理：2016年5月20日)

要 旨：医薬分業の進展やかかりつけ薬剤師の普及施策により，薬局での在庫負担は今後も増加することが予想される．各地域の薬剤師会を柱とした薬局間分割販売事業は，薬局の在庫負担の軽減において重要な位置づけにある．岐阜薬科大学附属薬局は，岐阜市薬剤師会の備蓄センター協力薬局として，薬局間分割販売業務を行っている．今回は，岐阜薬科大学附属薬局における分割販売事業の状況について現状を調べた．その結果，分割販売の実績は，地理的要因および価格的要因に規則性が観察された．また，抗生剤や後発医薬品，散剤の分割販売が多い傾向であった．本調査より，分割販売を利用する薬局に対し利便性の高い運用を考えるうえでの知見を得ることができた．

キーワード：薬局間分割販売，在庫医薬品，在庫管理，備蓄センター

一般用医薬品の適正使用に貢献できる薬剤師育成のための 卒後教育プログラムの構築とその効果(第2報)

藤田 吉明*¹ 赤川(佐々木) 圭子¹ 小田中友紀¹ 平岡 千英¹ 原 和夫^{1,2}
吉田 武美¹ 亀井美和子³ 木内 祐二¹ 中村 明弘¹ 山元 俊憲¹

昭和大学薬学部¹, 望星薬局(現・株式会社わかば)², 日本大学薬学部³

(受付: 2016年2月24日 受理: 2016年6月18日)

要 旨:セルフメディケーションの必要性が高まる現在, その支援を担う薬剤師に期待が寄せられている。すでに, 我々は独自に作成した一般用医薬品の適正使用に貢献する薬剤師の教育プログラムについて報告している。本研究では, 先のプログラムを改良しその有効性について検証した。保険薬局6施設に勤務する保険薬剤師72人を, 対照群および介入群に無作為に振り分け, 介入群には, 1回2時間計3回のプログラムを実施した。かぜ薬購入希望の模擬患者を用いたシミュレーションテストの結果では, シナリオの症状にあわせて適切な薬を選択できた人の割合は, 対照群が48%であったのに対し, 介入群81%と, 介入群は有意に適切な薬が選択できていた($p=0.005$)。しかしながら, 介入群に実施した質問紙調査では, 来局者に一般用医薬品の情報を提供する必要性を感じていても必ずしも実施できていない現状が示唆された。

キーワード:一般用医薬品, 卒後教育プログラム, セルフメディケーション, 薬剤師,
ランダム化比較試験

注射抗悪性腫瘍剤の後発医薬品への変更について 文書を用いた説明が患者に与える影響

平井 利幸^{*1} 渡邊 文之² 寺門 祐介¹ 秋山 裕史¹ 関 利一¹

株式会社日立製作所ひたちなか総合病院薬務局¹, 日本大学薬学部医療コミュニケーション学研究室²

(受付：2016年4月4日 受理：2016年7月1日)

要 旨：近年、抗悪性腫瘍剤においても後発医薬品の普及が進んでいるが、一般的に病院では、患者の後発医薬品への変更希望の有無は反映されず、採用医薬品の変更に伴い後発医薬品へ変更される。本研究では注射抗悪性腫瘍剤の先発医薬品投与中の患者に薬剤師が後発医薬品との同等性などについて、文書を用いて患者個々に合わせた説明をすることで、患者の後発医薬品に対する印象にどのような影響を与えるかを2011年と2014年に評価を行った。結果、後発医薬品全体の認識度や変更経験率は増加していたが、抗悪性腫瘍剤の後発医薬品の印象が良いと回答する患者は、ともに説明前は約20%であったが、説明後は80%以上に向上した。さらに、印象が悪いと回答する患者は説明後、皆無となった。本研究から、病院における注射抗悪性腫瘍剤についても薬剤師が後発医薬品について説明することは印象を改善し、結果、薬物療法に対する安心感が高まる可能性が推察された。

キーワード：抗悪性腫瘍剤，後発医薬品，薬剤師，注射剤，服薬指導

在宅医療における薬剤師のフィジカルアセスメント実施に対する 訪問医・訪問看護師の意識調査

今西 孝至* 赤尾 優輔 池邊晋一郎 高山 明

京都薬科大学臨床薬学教育研究センター

(受付：2016年5月16日 受理：2016年8月24日)

要 旨：2025年問題を背景に在宅医療の充実が求められており、在宅における薬学的管理のツールの一つとして薬剤師によるフィジカルアセスメントがある。そこで、京都市下および滋賀県下の訪問医・訪問看護師を対象に在宅での薬剤師によるフィジカルアセスメント実施についての意識調査を実施した。その結果、訪問医の83%、訪問看護師の97%が基本的に賛成であった。特に訪問医・訪問看護師ともに「副作用評価」や「緩和ケア」に期待していた。一方、反対意見では「医療従事者間の連携に対する未確立」や「フィジカルアセスメントの技能不足」があった。また、在宅での薬剤師によるフィジカルアセスメント実施に必要なこととして、訪問医・訪問看護師ともに「実際の現場での研修」と回答した。今回の結果より、在宅医療の充実を図るために薬剤師は「副作用評価」や「緩和ケア」の観点からのフィジカルアセスメントを実施し、実績を積み重ねることが重要であると考える。

キーワード：在宅、フィジカルアセスメント、訪問薬剤師、訪問医、訪問看護師、意識調査